

Title	百一年目の孤独 : ロベルト・ボラニョ 『通話』
Author(s)	松本, 健二
Citation	大阪外国語大学論集. 34 p.229-p.236
Issue Date	2007-03-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80004
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

百一年目の孤独
—ロベルト・ボラニョ『通話』—

松 本 健 二

El centésimo primer año de soledad.
—Roberto Bolaño, *Llamadas telefónicas*.—

MATSUMOTO Kenji

拙稿では1990年代以降の小説を中心とするラテンアメリカ文学の変容を考える上で欠かすことのできない重要な作家ロベルト・ボラニョ（Roberto Bolaño, 1953–2003）と、彼のエッセンスが凝縮されている一冊の短編集を紹介する。まずボラニョに至るラテンアメリカの新しい小説の流れをスペイン語圏に限定して概観しておくことにする。

ラテンアメリカ文学は、小説家のホセ・ドノソによって名付けられた1960年代のブーム、さらにはその頂点とも言えるガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』出版（1967）を契機とし、新しい小説の形態を提起し得る一文学領域として世界的認知を受けたものと一般的にはみなされている。世代としてのブームは、ガルシア・マルケスの他にカルロス・フエンテス、マリオ・バルガス・リョサ、フリオ・コルタサル、フアン・カルロス・オネッティ、エルネスト・サバトなどの小説家を含む。また、受容の側、すなわち研究批評の文脈や海外の翻訳の読み手までもを含めた広義の現象としてのブームは、時代的に先行するホルヘ・ルイス・ボルヘス、アドルフォ・ビオイ・カサレス、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス、アレホ・カルペンティエールなどの重要作家に関する再評価を伴うものであった。日本における研究・翻訳が軌道に乗ったのも、このブーム以降、すなわち1970年代以降のことであり、その担い手の多くは対象言語を同じくするスペイン文学研究からの越境者であった。そういう意味では、国内的にはラテンアメリカ文学自体がまだ比較的新しい研究領域であり、他の主要西欧言語の文学に比べれば、翻訳事業もいまだ初期段階にあると言える。

こうした状況において、ブーム同様に注目されるべきは、ブーム以降のラテンアメリカ文学における小説の現況、すなわちポストブームの動向である。

ポストブームの定義は現在この語を使用する論者によって微妙に異なるが、大きく分けて二つの区分がある。ひとつめはブームの延長線上に発生した新機軸としての次世代型作家とその作品を指すもので、主に1970年代以降に主要な活動を展開した作家たち、たとえばポピュラー文化を取り込んだ新しい文体の創造に成功したマヌエル・プイグ、西英語二言語による言語遊戯を試みたギジェルモ・カブレラ・インファンテ、ガルシア・マルケ

スの後継者として語りの新境地を切り開いたイサベル・アジェンデ、渡欧後コルタサル『石蹴り遊び』の流れを汲む“パリのラテンアメリカ人像”を書き続けているアルフレド・ブライス・エチェニケなどがその代表である。時代的にも作品傾向においても、これらはむしろブーム後期と呼んでもよいくらいブームとの共通項が多い作家たちだ。ふたつめはブームとの時代的・領域的接点を持たず、むしろ最初から一定の距離を置いて創作活動を開始した世代であり、ここにはボラニョなど、主に第二次大戦終了後に生まれ、1980～90年代に主要な作品を書いた作家たちが含まれる。

ポストブームを考える上で重要なことは、1960年代から1970年代へかけて見られるある種の断絶が、単なる世代の交代に留まらない複雑な背景を持つという点である。ブーム成立の背景としては、急激な都市化によって一気に顕在化した歪な社会構造など、作品の舞台を提供した具体的現実に加えて、カルロス・バラルを中心としたバルセロナにおける出版事業興隆と文壇形成による書き手の環境の変化などが挙げられるが、受容の側までを視野に入れたより巨視的な観点からすると、やはり1959年に起きたキューバ革命の余波を忘れるわけにはいかない。カストロ政権にとって特に有害なアメリカ的要素以外は積極的に推奨されたキューバの文芸振興は、結果的にラテンアメリカ文学・文学研究全般に大きな財産をもたらし、寡頭支配層と国外資本による従属の構造を打破した革命の達成自体が、世界がラテンアメリカ地域全体からの発信に対して民間レベルで友好の目を向ける大きなきっかけとなった。ところが1970年代に入るとそうした楽観的観測を可能にする話題が激減し、むしろ60年代の希望に満ちた未来志向を打ち消すような暗澹たる事件ばかりが続発する。象徴的な事件に限定して述べると、まず1968年メキシコ・オリンピックが開催された年、首都メキシコ市で反政府運動に対する軍事出動に端を発した流血騒動、いわゆるトラテロコ事件が起きる。1973年にはチリでアウグスト・ピノチェトによる軍事クーデターが勃発、またウルグアイでは1973年、アルゼンチンでは1976年に誕生した軍政下、これら3カ国は主として思想的監視により多くの失踪者（desaparecidos）を出す暗い時代に突入する。共産主義のドミノ化を恐れるアメリカと、キューバを橋頭堡とするソ連との代理戦争は、中米など多くの小国を長年に渡る内戦の泥沼へと巻き込んでゆく。文学の領域においてこうした悲観的状况に追い討ちをかけたとも言えるのが、詩人のエベルト・パディージャがキューバ国家公安局によって逮捕され、その思想的自己批判が全世界に公表されたことに端を発する国際的騒動、すなわち1971年のパディージャ事件である。これをきっかけにブーム世代の中にもキューバの文化政策に対して明確な批判的姿勢を打ち出すバルガス・リョサのような作家が増え始めた。

魔術的リアリズムに代表される様々な実験的手法を用いて、一国・一地域の実像を、その神話にまで遡り、総体的・象徴的に描こうと試みたブーム世代の“大きな物語”への志向は、上述した1970年代初頭に始まる暗い時代の予感共有を背景として、徐々に様々な方向へと拡散していくこととなる。ブームの大きな物語を文体的特徴と物語内容の傾向から“反合理主義的”（antirracionalista）という形容詞で総称する場合がある⁽¹⁾。この反合理主義は、特に1990年代以降のポストブームにあつては、オリジナリティと言うよりむ

しろ破棄すべき紋切り型と否定的に看做されることが多く、既にその萌芽はブームがまだ勢いを保っていた1970年代にまで遡って観察することができる。まず国家や神話や民族や歴史解釈などといったマクロ的な虚構重視への反動として、メキシコの若手作家を中心とする文学運動オンダに代表されるような、書き手にとってのミニマルな日常をポップな文体で描き出す作品が増えてくる。この傾向は、小説中にラテンアメリカ内外のポピュラー文化との接点を数多く生み出した。ブイグやブライス・エチェニケの小説やカブレラ・インファンテのエッセイにおける現実を解釈する上で、映画をはじめとするアメリカの大衆文化に関する理解は欠かせない。探偵小説などいわゆるB級文学への志向も70年代以降に顕著であり、スペインの古典や19世紀までの大長編小説への積極的言及が目立つブームの作家たちの読書暦に比べると、たとえばボラニョの読書暦にはフィリップ・K・ディック、ジェイムズ・エルロイ、ブコウスキーなど、アメリカの現代文学やライト小説がより多く含まれる傾向にある。リカルド・ピグリアのように探偵小説を戦略的に手法として用いる作家もいるし、ポール・ボウルズを慕って小説を書き始めたロドリゴ・レイローサもいる。彼らの小説を読んでいるだけでも、この地域の作家たちの文化的ルーツがスペイン語などロマンス語系の伝統以外の諸領域へと拡散しつつある現状に気付かざるを得ない。またエレナ・ボニアトウスカの『トラテロルコの夜』(1971)をはじめとする事実性を重視した証言文学(literatura testimonial)は、元々ジャーナリズム志向の強い作家が多いこの地域において、とりわけ書き言葉を持たないセクターの声を拾い上げるツールとして、今もなお有効な発信方法のひとつであり続けている。

さて、こうした文体や内容に関わる方向性の拡散とは別に、ポストブームに共通するひとつの特徴として、書き手の発信する中心地の拡散が挙げられる。

この拡散傾向を示す特徴が、ボラニョをはじめとする祖国離脱者の増加である。ラテンアメリカでも、今日、政治・経済的理由により越境せざるをえない人間にとって、移動の選択肢が飛躍的に拡大している。そうした現状を受け、文学の書き手の居場所も急速に拡散し始めている。レイナルド・アレナス、カブレラ・インファンテは言うまでもなく、実は今日のキューバ文学はキューバ出身者の文学と呼ぶしかないほどの複雑な様相を呈している。元々こうした事態が決して珍しくないスペイン語使用地域がプエルトリコだ。プエルトリコ系作家がニュージャージーから発信しているスペイン語・英語混在の文学をアメリカ文学とするかラテンアメリカ文学とするかを問う不毛な議論、つまり地域・国民・単一言語というような、文学を特定の諸領域に分別する伝統的境界線が事実上破綻しつつある今日の現状、これは言うまでもなく、旧植民地を多数抱えるスペイン語など話者数の多い西欧言語世界の周縁地域において極めて分かりやすい形で見ることができる。

ボラニョも1953年にチリで生まれ、20歳のときピノチェットのクーデターに遭遇、投獄経験を経た翌1974年にメキシコへ移住し、1977年から2003年に亡くなるまでスペインに居を定めた。スペイン語圏に3箇所の定住地を持ったボラニョという作家を、今日チリ文学という範疇に入れることは困難であるし、ラテンアメリカ文学という枠を当てはめることすら容易ではない。スペイン語支配が及ぶ文化領域という文脈で、旧宗主国文化をビ

ラミッドの最上段に位置づける影響野を表すスペイン語圏文学 (letras hispánicas) という語法があり、それに対抗する形で、新大陸固有の文化的アイデンティティ確認の場としてのラテンアメリカ文学という領域設定がブーム時代までに進んだとするならば、21世紀の今日では、そうした文化の伝播過程における中心周縁の二項化や文化的所属意識の誇示を特に示唆するわけでもない、単なる「スペイン語で書かれた文学」という無色透明な範疇のほうが、むしろ説得力を持つようになってきている。このようなスペイン語文学作家としてのボラニョにとっての同時代作家とは、ラテンアメリカのポストブームに属し1980年代以降に主要な作品を発表している新世代の作家たち、すなわちセサル・アイラ、ピグリアといったアルゼンチン出身の作家や、フアン・ビジョロ、ホルヘ・ボルビといったメキシコ出身の作家たちは当然のことながら、実際にはそうしたラテンアメリカ出身の作家だけには留まらず、ハビエル・マリアスやエンリケ・ビラマタスといったスペイン出身の現代作家たちをも意味しているとみなすべきであろう。

時代的位置づけをこの辺で終え、今度はボラニョの作品を前期に限って紹介しておく。ボラニョは大学へは通わず読書と独学で作家としての自己形成を行い、まず1974年から3年間のメキシコ時代には詩人として *infrarrealismo* なるグループに加わり前衛的な散文詩集を3冊刊行している。スペインに移住してからは本人いわく妻子を養うために小説を書き始め、各種の文学賞に投稿、スペインの地方都市を舞台に3人の登場人物の独白が交錯する筋立てのスリラー『スケートリンク』(*La pista de hielo*. 1993, Alcalá de Henares, Fundación Colegio del Rey) や、ペルーの詩人セサル・バジェホのバリ時代を題材にスペイン内戦やメスメリズムに関係する複数の人物が暗躍する裏社会を描いたスリラー『象の通り道』(*La senda de los elefantes*. 1993, Ayuntamiento de Toledo. 後に『ムッシュ・パン』 *Monsieur Pain*. 1999, Anagrama として改稿) などを刊行する。そして、未来に書かれた虚構の文学史という特殊なスタイルを借りて「文学を書く」という行為から透けて見えるラテンアメリカ的な悪の問題を追及した異色作『アメリカのナチス文学』(*La literatura nazi en América*. 1996, Seix Barral) で高い評価を受け、これを読んだアナグラマ社のホルヘ・エラルデに才能を見出されると、次は前作『ナチス文学』の中の1エピソードを膨らませた長編小説『遠い星』(*Estrella distante*. 1997, Anagrama.) でピノチェト政権下のチリで誘拐暗殺に関わった前衛詩人追及の物語を展開、続けて『通話』(*Llamadas telefónicas*. 1997, Anagrama) とメキシコ北部に消えた謎の文学サークルをめぐる探求物語『野生の探偵たち』(*Los detectives salvajes*. 1998, Anagrama) という彼の代表作2冊を立て続けに発表する。

短編集『通話』は＜通話＞＜探偵たち＞＜アン・ムーアの人生＞による3部構成で、全14編の短編を含む。最初の＜通話＞には、スペインやフランスを舞台にした作家と思しき人物の物語4編と、表題作の短編「通話」が含まれる。そのどれもが作者の分身と思しきBを語り手／主人公とし、実際の台詞の合間にカンマを挟んで「彼は言った (dijo)」の類の導入説が挿入されるというボラニョの特徴とも言える軽快な文体で進行する。冒頭の「センシニ」はオネッティやダニエル・モヤノを髣髴とさせるラプラタ出身のベテラン

亡命作家と語り手がスペインで文学賞をめぐる交流を試みるというエピソードだ。第二次大戦中の冴えないフランス人作家を描いた「アンリ・シモン・ルブラン」や、不可解な雑誌編集に携わる亡命チリ人作家を描いた「エンリケ・マルティン」にも共通していることだが、ボラニョはいわゆるマイナー作家をめぐる嘲笑的な内幕ものを書くことが非常に多い。ボラニョ自身がインタビューで“発展途上国にはメジャー文学しかあり得ない。単調かつ黙示録的な日常の風景にあっては、マイナー文学は到達し得ない贅沢なのだ⁽²⁾”と述べているところを見ると、ブームの巨匠をはじめとする国際的に名の知れた作家以外の地下世界、すなわちラテンアメリカ各地や全世界に点在する無数のマイナー文学の担い手たちによる、いわば応答無き孤独な発信の様態そのものに、ボラニョが強い関心を示していたことがうかがえる。作家のBが自分の書く新作をことごとく書評で取り上げる批評家との間で繰り広げるドタバタ劇「文学の冒険」も含め、こうした内幕ものにおいては、著述という発信行為を通して垣間見えるコミュニケーションの困難さ・無理解の連鎖が、ある意味で一貫したテーマとなっているように思われる。次の＜探偵たち＞の章には『野生の探偵たち』と同時に書かれたと思しき探求のエピソードが多い。ここで語り手の探求の対象となるのはマイナー文学ではなく、人生自体がマイナーとも言える、まさに歴史の狭間に零れ落ちた平凡な人々の生活である。チリに生まれ、クーデターと同時にソ連へ亡命、ソ連崩壊後は闇経済に関わり、その後はバルセロナで体操の教師をしていた男の物語「雪」や、米墨どちらの国家にも所属することなく、代々の構成員が暗殺を生業としてきたソノラ州の寒村出身の男の物語「芋虫」がその代表である。これらはいずれも国家、民族、近代文明、大きな拠り所を失ったまま複数の都市間を浮遊するように生きる流浪者の物語であると言えるだろう。そして、最後の章＜アン・ムーアの人生＞では、同名の短編に象徴されるような都会に生きる女性の孤独が描かれている。

『通話』の主題は孤独である。実は孤独とはラテンアメリカ現代文学に顕著な一本の問題系を形成している。個と個とのコミュニケーションが断絶した事態を状況論的な孤独とするならば、情緒的交感がなされた環境下でも訪れる可能性のある、主体によって内面化された深層の孤立意識もまた孤独である。その表れかたは実に多種多様であり、たとえば孤独にまつわる近代日本独自の様態だけでも＜共同体における孤立＞＜市民社会における内面化された孤独＞＜大衆社会における原始単位的な孤独＞と少なくとも三つに分類され得ることが指摘されている⁽³⁾。すなわち、孤独をめぐる問題は、特定文化圏における個の歴史的存在様式をあぶり出す装置として機能し得る。上述の三分類と同様の範疇をラテンアメリカにそのまま適用することは不可能だが、共同体・内面化・大衆といった、西欧近代を受容した地域における個のあり方の発展類型に基づく概念を応用しつつ、ラテンアメリカ文学に表象されたこの地域独自の孤独の諸相を考察することは可能であろう。

たとえばオクタビオ・パスは、そのメキシコ論『孤独の迷宮』（1950）において、他者に対して自己を閉ざす傾向にあるメキシコ人の精神性をひとつの病理と見立て、その原因をメキシコという病人の生い立ち、すなわち歴史に探求した。これは象徴的にスペイン人という父と先住民という母をもつラテンアメリカ全般に応用が可能な普遍的解釈であり、

半世紀を経た今もなおラテンアメリカ文学における個の問題を考える上で再読に値する。詩人であるパスの孤独に対する認知様式は、西欧近代詩を論じた『弓と豎琴』（1956）などにおける美学的概念アイロニーとして、アナロジーやリズムという詩作の根源となる調和原理との相補関係を構築している。すなわち、パスにとって孤独の意識化とは人間の存在様式の原点であると同時に、他者との融合へと向かうエロティシズムなどの原理を支える補完的要素でもある。そういう意味で、パスは、孤独を早急に解決すべき社会問題、あるいは憂慮すべき否定的な事態であるとみなしているわけでは決してない。

いっぽう、ガルシア・マルケスにおいては孤独が通低音とも言える一貫したテーマとなっている。周知のように、小説『百年の孤独』では、マコンドという共同体の成員間の交流挫折が無数の挿話を介して披露されてゆく。この挫折は愛の不在という安直な詩的表現に還元できるほど単純な事態ではない。マコンドの孤独を形成している最大の要素は、むしろ各構成員が他者と関わり合う際に依拠している複数のコードの微妙な齟齬にある。先史時代の恐竜の卵のような石が転がる新天地に神話的始祖が築き上げたマコンドという原始共同体には、メルキアデスの磁石などに象徴される近代世界の社会関係を規定するツールがたった百年間の間にそれこそ山のように侵入してくる。こうしたツールをそれに見合った有効な方法で使いこなす術を知らず、最終的にはガラクタの山に放置してしまうブエンディエアの行動様態にこそ、実はマコンドの孤独を解き明かす秘密が隠されている。古代とスペイン式中世と近代とがアクチュアルな現前において混在しているマコンド（＝ラテンアメリカ）では、その各時代に見合った個の行動様式がその背景となる原理と歴史を欠いたまま共存しているのであって、その複数様式間のあまりの統一の無さと無秩序こそが、彼らの間の交流不全を引き起こす主たる原因となっているのである。ラテンアメリカの大多数の地域において、実は近代西欧型の自主的な孤立の選択は達成しがたい贅沢であり、彼らにとっての孤独とは選択の結果ではなく常に宿命として立ち現れる。たまたラテンアメリカの都市を舞台にした大衆社会型の“栄光ある孤独”の物語があっても、それは白人有産インテリ階級という各該当地域において極めて特異な（マイナーな）個の一例を取り上げているとみなさざるを得ない。

また、ガルシア・マルケスやフエンテスやバルガス・リョサをはじめとして、ブーム世代には、フォークナーのヨクナパトーファに相当する、終末感漂う閉鎖的物語空間を初期設定している作家が少なくない。たとえばその代表的作家のひとりであるオネッティによる『造船所』（1961）など一連のサンタマリアを舞台にした小説も、やはりすべて孤独と絶望の物語である。ただし、ここでの孤独も、やはり成員間の欲望の表現方式の齟齬に起因する泥沼の状況として描かれており、それは決して社会問題として扱われてはいないし、また、他者による無償の理解、すなわち宗教などの抽象や愛という名の感情的交流によって救済されるべき「一過性の窮状」とは看做されていない点に注目すべきである。

少し毛色は異なるが、孤独というテーマで概観するならば、ラブラタ文学圏で顕著ないわゆる独我論（solipsismo）の存在も見落とすわけにはいかない。ボルヘスやコルタサル

る哲学的命題として取り上げられることの多い独我論であるが、個のあり方という問題に引き寄せて再読してみると、たとえばビオイ・カサレスであれば、あの独我論の極みとも言えるべきSF小説『モレルの発明』の背後に、実は男女間の欲望形式のずれを軽妙なタッチで描いた無数の恋愛挫折小説が控えていることに気付く。アルゼンチン人の内面化された実存的孤独に取り組み続けたサバトは言うまでもなく、大都市の集合意識とも言える人物の彷徨を描いた『アダン・ブエノスアイレス』のレオポルド・マレチャルなど、この地域の文学においてもやはり孤独が重要なテーマとして根付いていることを改めて認識せざるを得ない。

いっぽう、内面化された近代市民としての自意識を抱える人物が、主に所属集団内での役割遂行に関わる意見の相違から、家庭や共同体をはじめとする、他者との特定の関係性の原理を共有する様々な組織集団において孤立するという構図、すなわち自我を持つ個とそれに鋭く敵対する集団という対立の構図は、ラテンアメリカ文学においては比較的まれにしか見られないという印象をもつ。その証拠に、同じ西欧近代を短期間に受容しておきながら、ラテンアメリカには、日本的な私小説に相当するような、作家個人による知的泥沼状況の自虐的開陳行為というものがあまり見られず、同時にビルドゥングス・ロマンスに相当するような、個が他者や集団との発展的和解を遂げて行く物語も非常に少ない。強いて挙げるなら、近代市民型意識の高揚に伴う、所属集団内での孤立意識の表象は、ポストブームのひとつの傾向ともいえる女性ライティングに顕著なようである。

さて、こうした中、ポストブームの最先端を行くボラニョにしても、やはりある種の孤独の血脈とも呼ぶべき伝統の中で、先行するラテンアメリカ小説の世界との類縁性を見出すことが可能である。短編「アン・ムーアの人生」はカリフォルニアに住むアメリカ人女性の半生を描いただけの、一見すると何の変哲も無い人生模様の描写である。大都市固有の独居者に関するレポートとも言えるこの短編の主人公アンは、ノイローゼの姉をはじめとする数々の人物との出会いや恋愛を通して、帰属意識や集団との力学に関してまさに学ぶところが無く、一向に懲りず、まったく成長しない人物として描かれている。同じく短編「クララ」の主人公であり、語り手と十年以上に渡る電話での交流を続けながら三度の結婚にことごとく失敗するスペイン人女性クララも、やはり学ばない懲りない人物である。アンやクララにおける、他者との交流を最初から予定していないようにすら見える根源的な孤独の中心にあるのは、いわゆる内面志向型の精神性が、個の役割分担があらゆる場所で高度に制度化された大衆社会において、まさに行き場を失ってもがいている窮状と定義できるかもしれない。所属集団内での役割要求と自己の欲望との差異によって生じる孤立の意識は、たとえばアンの場合にはセックス（パートナー選択および行為に際しての役割選択）から職業選択において、クララの場合には家庭生活と職業選択（出産か趣味か）においてもっとも過激な形で表れる。家庭や職場という一次集団以外に、個としての他者交流を保証する中間干渉地帯を持たない都市型独居者たる彼女たちの精神的受け皿となっているのが、唯一電話を通じて彼女たちと交流を続ける語り手だ。本書の題名である『通話』という語は、電話という物理的道具が介在してもなお根強く残存する孤独の

生態を示唆すると同時に、それでもなお“呼びかけ (llamada)”を続け、応答を求めているかざるを得ない人間の不可思議な欲望のあり方に言及していると解釈できる。

ヨーロッパやアメリカの都市部を舞台にしたボラニョの短編は、たしかにその大半が独居者をめぐる物語であるが、そこでは北側高度資本主義国に特有の均質型大衆社会における原子的孤独や疎外が“今風のライフスタイル”という意匠として肯定的に捉えられているわけでもないし、逆にラテンアメリカ的な複雑きわまる孤独の諸相が十分に反映されたようなブーム風の問題意識も見られない。むしろボラニョの短編で顕著なのは、祖国離脱という孤立を背負った語り手による、異なる様々な場所を住处とする独居者への共感姿勢なのである。応答する読者を持たないまま地球の片隅で執筆を続ける同業者たち、アメリカにおける大衆社会型の孤独を背負う女たち、さらにはスペインやフランスにおける亡命者の孤独から、メキシコの僻地で歴史に忘れ去られたまま現代に生きる人々の意図的孤立に至るまで、すべてが語り手による淡々とした判断保留の表現というフィルターをくぐることで、その存在意義を生々しく顕わにする。

拙稿前半で述べたように、ポストブームの最先端に位置するボラニョの小説は、もはやラテンアメリカ文学という範疇に含めるには無理のある普遍性をもっている。その彼をかりうじてラテンアメリカに繋ぎ止めているのは孤独意識の内面化であろう。五百年前に起きた異なる二つの世界の衝突に始まるラテンアメリカの歴史とは、今日に至るまで、まさにそれ自体がひとつの巨大な“交流不全”の連続であった。そこをたくましく生き抜いた人々が『百年の孤独』のグロテスクであると同時に極めて人間的な世界観を築き上げてきたわけである。そういう意味では、ボラニョの短編集もまた、魔術的リアリズムや幻想などブームに特有の反合理主義的文体から離脱した地点で書かれ始めた、新たな離散世代によるラテンアメリカ的孤独の物語であると看做せるはずだ。

- (1) Teodosio Fernández, “Narrativa hispanoamericana del fin del siglo. Propuesta para la configuración de un proceso” (*Cuadernos hispanoamericanos*, No. 604, 2000, pp. 7–13).
- (2) “Carmen Boullosa entrevista a Roberto Bolaño” (Celina Manzoni (ed.), *Roberto Bolaño: La escritura como tauromaquia*, 2002, Corregidor, pp. 97–113.), p. 106.
- (3) 作田啓一『恥の文化再考』1967年、筑摩書房, pp. 7–72.

(2006. 8. 3 受理)